勝林寺寺報

私の生きてきた昭和

私は、大正十四年（１９２５）年一月一日に生まれた。大正末期であり、いわば日本の歴史の大きな分かれ目のような時期でした。この年の三月には、帝国議会で「治安維持法」が可決され、同時に「普通選挙法」も通過しています。国民の参政権を制限付きながら認めると同時に、左翼運動の取り締まりに踏み切りました。

私の家の真向かいに広瀬さんという二階建ての武家屋敷があって、私はよくそこへ遊びに行っていたのでしたが、いつかそこのお兄さんが腰ひもにつながれて連れて行かれたのを見ました。それからまもなくその家もなくなり、のっぱらになったところでスイスイグサをつんで遊びましたが、とても寂しかったことを思い出します。

小学校一年生の読み方の本は「はな　はとまめ　ます　みの　かさ。からすがいます　とりいがあります　ひのしもあります」でした。一つ下の隣の女の子のは、色刷りで「さいたさいたさくらがさいた　すすめすすめへいたいすすめ」に変わっていました。はやこのころから時代は大きく変化をしていたようです。

私には上と下、それぞれ三つ違いの姉と妹がいましたので、大げさに言えば大正ロマンの世界に長くいたのかもしれません。北原白秋の童謡などののった少女雑誌を姉妹の友だちの中で見せてもらって遊びました。「鐘つき堂」と寺の本堂の縁側が絵本を読んだり、おじゃみをしたりする場所でした。姉妹の友だちの下駄屋の澤田のしなちゃん、薬屋「あかねや」のとくちゃんなどに、すごろく・歌などをおしえてもらいました。

その一方で、近所の高等科のお兄ちゃんに教えてもらって、私の向かい側の杉垣で杉てっぽうを作って遊んだり、本堂の縁の下でチャンバラごっこをして遊んだりしました。冬は、お城山の登山道の傾斜が、格好のスキー場で、たけスキーやそりを自分たちで作って遊びました。棒切れに顔をかき、簡単な服を着せた人形を作り、「家なき子」などの人形芝居を、他町まで出かけていき、公演したのをおぼえています。

夜の「火の用心」は子どもの仕事でした。毎晩大声で「火の用心　戸の用心　足元から鳥が立つ」と叫んで、ときには他町の夜回りと石の投げ合いのけんかになることもありました。

小学校入学時には、一里もある宮内の「一宮」まで行って、終身の教科書をもらいました。その神様は「天のひぼこの命」といって、朝鮮の国からわたってきてこの地方を開拓したのだと教えてもらいました。日本の神様からもらわないで、なぜ朝鮮の神様からもらうのと先生に尋ねましたが、先生も知らないということでした。子ども心に納得がいかなかったことを覚えています。

私が小学校に入学した年に、満州事変が起きました。また、次の年、私の父哲雄が、京都大学病院で死にました。盆も過ぎた八月二三日、私が自転車に乗れたことを喜び「父のように布教使にはなるな、聞法者になれ」と、私に言い残しました。父が死に、母（八重野）が亡くなる昭和一〇年二月まで、特に私にとって激動の時代でした。その間に、弟の哲心も亡くなりました。（裏面上段に続く）

（文責　前住職）

餅つき・除夜会・修正会のお誘い

早いもので、今年も残すところあと一か月となりました。まだ若かった私に「年齢を重ねるごとに、歳月の流れを「早い」と感じるようになるんですよ」と教えてくださったのは、今年お浄土にまいられた数森三男さんでした。懐かしく「なるほど」と思います。

勝林寺の本堂で、みんなで、今年一年を締めくくり、新しい年をお迎えいたしましょう。お待ちしています。

餅つき

十二月二十七日　午後二時より

＊参加者は、つきたてのお餅をいただけます

除夜会

十二月三十一日　午後十時半より　お勤め

午後十一時半より　鐘つき

修正会

一月一日　午前０時より　お勤め

法話

＊三十一日午後十時より、境内で火をたき、お酒・甘酒・各種雑煮でおもてなしいたします。誘い合わせてお参りください。

葬儀

十一月三日　上小田　濱　ふみゑ様　九十四歳

十一月十二日　榎見　横山すづ子様　九十一歳

一二月　勝林寺　予定

一日（月）　保谷・日殿　報恩講

兵庫教区　組長会

二日（火）　濱　美知代宅　忌明

奥小谷　報恩講

四日（木）　太田・東里　報恩講

唐川　報恩講

五日（金）　上小田　報恩講

七日（日）　上小田　托鉢　報恩講

勝林寺　合同役員会

九日（火）　市場　報恩講

上小田　報恩講

一一日（木）　野尻・矢根　報恩講

出石組　実践委員会

一二日（金）　矢根　報恩講

一三日（土）　宮嶋重喜宅　一周忌

一四日（日）　出合　報恩講　総仏講

一五日（月）　暮坂・日野辺・百合・寺坂

桐野　報恩講

上小田　総仏講

一六日（火）　丸中・片間　報恩講

一八日（木）　信楽先生を偲ぶ会

一九日（金）　鉢山・豊岡　報恩講

二一日（日）　口小谷　報恩講

二二日（火）　平野睦美宅　一周忌

二四日（水）　出石組　連研反省会

二六日（金）　みのりを聞く会

二七日（土）　横山伸三宅　忌明

餅つき

三一日（水）　除夜会

（敬称略）

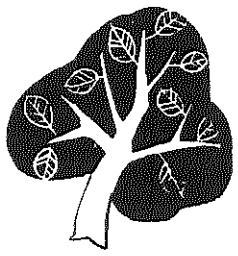
（前のページより続く）父が亡くなり、母が亡くなるまでの期間はわずかでしたが、母の薫陶は印象的でした。この母は、幼い私に子守唄の代わりに日本の古典の冒頭部分を音読して聞かせました。また、父が死んでからは、毎朝本堂で「お勤め」と「お説教」と「お掃除」を仕込みました。お勤めは新しく制定された「お正信偈の新節」でした。お説教は、高座の上に座らせて、自分は下に平伏して真剣に聴聞します。その一つ

聞いても　聞いても　何ともない
何ともないのが　おらじゃゆえ
おらがあるゆえ　おやがある
おとしはせんぞ・・・

それがすむと、今度は、本堂内陣の板張りをぬか袋で拭き掃除。厳しかったが、私には強い印象を残しました。

この間、私は、目を患い、福知山の叔父（のちの養父）に預けられ、二年間学校を休み療養しました。時折、母が見舞いに訪れ、盲目の私を背負いながら唱えた「和讃」（親鸞様のうた）は、私にとっては大切な母の遺言でもありました。

弥陀成仏のこの方は
今に十劫を経たまえり
法身の光輪きわもなし
世の盲冥をてらすなり



このころ皇太子様（今の天皇陛下）がお生まれになり、満州事変が起こりました。

私が休学ののち、弘道小学校二年に復学したころ、講堂のステージは東から西に移動して、学芸会で天皇様の歴代の御名を称えることが行わるようになりました。また、四大節の日には、校長先生が校庭の東の丘の奉安庫から恭しく「こしんえい」を奉載して、天皇様を讃える歌を皆で歌いました。このころ「君が代」が国家になりました。

満州事変が起こった時の私の担任であった福富先生は、学校をやめて満州に行ってしまわれました。代わって海軍をやめて先生になった大森一夫先生が六年まで担任をしてくださいました。時折学校にこの町出身の内藤陸軍大佐が来てその講話を聴きましたし、戦争宣伝の短編映画などを見せられることもありました。

私が京都の「私立平安中学校」に入学する一年前の七月に日中戦争が始まり、「国家総動員法」が公布されて戦争一色の世の中になりました。それでも中学の間はまずまず正常の学習はできていたように思います。私は、小学校で二年間休学していましたので、それを挽回すべく中学四年で大学予科を受験して合格しました。しかし、そのころの大学は軍国主義で丸つぶれ。学校には、配属将校がいて、軍事教練が行われ、また、レッドパージの風も吹き荒れていました。外国語は敬遠され、歴史教育は厳しい監視にさらされました。現に何人かの先生が、学校から姿をけし、軍隊志願をして学校をやめる生徒もいました。

私の大学予科入学の前年一二月、日米間に大東亜戦争が起こり、昭和二〇年夏の広島・長崎への原爆投下にいたるまで、国民あげて戦争の波にのまれていきました。私も、二〇年に召集され、鳥取、広島、高知の部隊を転々としました。軍隊ではすでに天皇の「教育勅語」をこえて「戦陣訓」が尊重され、東条英機の声が響き渡っていました。や燈火管制のサイレンの音が毎夜毎夜鳴り響いていました。（次号に続く）

（文責　前住職）

法語カレンダー十二月（HPより一部抜粋）

永遠の拠り所を与えてくださるのが南無阿弥陀仏の生活である

（前略）どの時代であれ場所であれ、人間は「しあわせ」になることを求め、努力してきましたが、果たして本当の「しあわせ」を得られたかといえば、大いに疑問です。なぜならば、私たちの求める行為そのものが、自己中心的な欲望にもとづくものに他ならないからです。その自己中心性（我執）に振り回されている人間を「凡夫」というのです。

今日では「しあわせ」を「幸せ」と書きます。その「幸（さち）」という漢字は「恩寵（おんちょう）」を意味するだけでなく、「貪（とん）」と同義で「むさぼる」という欲望をも意図します。自己中心的な欲望によって貪り続け、足ることを知らない生活をしている限り、「幸」は「めぐみ」でなく、「むさぼり」となってしまい、足らないことに不平不満をこぼすだけになっていくのです。さらに、自らの欲望を充足させるために、他者を傷つけるだけでなく、気づかないうちに自分をも傷つけているのです。「しあわせ」は本来、「仕合わせ」と書いていました。それは、それぞれのいのちの営みに相違がありながらも、それぞれの出合いの縁を認め合い、許しあって育みながら、ともに生きていることを喜ぶことだったのです。

それには、凡夫の身勝手な我執の殻が破られる必要があるのです。その我執を破るはたらきこそ、阿弥陀如来の智慧と慈悲であり、「南無阿弥陀仏」の名号の功徳（功徳）なのです。

内藤昭文（大分県法行寺住職）

どすん

毎月「どすん」を読んでいただきありがとうございます。ときどき「『どすん』楽しみにしていますよ」と声をかけていただきます。うれしくて、（よーし、がんばろう！）でも、月末になると（なに書こう）（涙）さて、今回は、このどすんコーナーの裏面の行事予定の中に、毎月登場する「みのりを聞く会」を紹介します。この会は、毎月二十六日午後七時半から行っています。浄土真宗の基本である「聴聞」を気軽にしていただきたいとの思いで続けているささやかな会です。最初に正信偈をお勤めし、次に住職の法話を聴聞します。十一月は、前にある駐車場の係の方に「お宅のお寺は、いつもたくさん人が集まられて楽しそうですね」と声をかけられたことをきっかけにしたお話でした。ものは、在るだけではいのちをもたず生きない。勝林寺の本堂は、確かにたくさんのご浄財をいただき立派に整えられています。しかし、それだけでは輝けません。たくさんの皆さんがお参りしてくださり、多くの方が集ってくださり、使ってくださるから、いのちを吹き込まれ輝いているのです（なるほど）。そして、究極の無常のいのちをいただいておられるのが阿弥陀様なのだと。身近な話題を取り上げ、わかり易く教義を聞かせていただきます。そのあとは、みんなでお茶を飲みながら、世間話に花を咲かせます。柿を食べたクマの話から、神戸で遭遇したイノシシの話、そこから広がって娘の希里の話。持ってきていただいたゆずを見ながら、ゆずぽんの作り方、ゆずジャムの話などなど。話題は尽きませんが、夜も更けるので、八時半過ぎにはお開きにします。日中は出にくい方、長時間は出にくい方、おしゃべり好きな方、住職や坊守の顔が見たい方（笑）ぜひお参りください。（文責　坊守）